讀賣新聞
2013年(平成25年)
1月21日月曜日

讀賣新聞

孤立死防止 抜本策描けず

異変察知 業者と連携限界も

札幌・姉妹死亡1年

札幌市白石区のマンションで40歳代の姉妹が孤立死したのが見つかってから、20日で1年となった。札幌市と道は、異変を察知するための対策を打ち出したが、抜本的解決には至っていない。行政に頼るだけでは限界があると、民間サイドで家族や地域との絆を深める取り組みも出ている。

（土居宏之）

■孤立死　法的な定義は明確ではないが、道は市町村に「社会との接点を絶たれ、死後1週間以上放置されたケース」を念頭におき、報告するように求めている。

■高齢者18件確認

姉妹が息を引き取った4階建てのアパートを再び訪れた。遺体で見つかった1年前と同じく外観はグレーのままで、周囲に雪が積もり、静けさが漂う。

誰にもみとられずに亡くなる孤立死は、その後も道内で後を絶たない。

倶知安町では昨年7月、無職の男性（当時73歳）が孤立死しているのが見つかった。札幌市内でも相次いでいる。

道は対策を検討するために、高齢者を対象に緊急調査を行った。その結果、昨年1月～8月だけで12市町・計18件の孤立死が確認された。

道内の主な孤立死の事例

発覚日時	場所	概要
2012年1月	札幌市白石区	40歳代の姉と知的障害のある同居の妹。生活保護の相談に3度訪れたが申請に至らず
	釧路市	高齢者夫婦が共同住宅で死亡
7月	倶知安町	町営住宅に住む無職男性（73）。生活保護を受給していたが担当ケースワーカーは異変に気づけなかった
	札幌市西区	1人暮らしの男性（59）。料金滞納で電気などが止められていた
11月	札幌市東区	80歳代の母親と60歳代の息子が死亡。生活保護を受給中だった

人との絆 見つめ直して

遺品整理ノートで

亡くなった人の室内に残された物を、遺族に代わって回収、整理する仕事をしているのが遺品整理士だ。

「孤立死は人ごとでない」と、遺品整理士認定協会（千歳市）は昨年12月、死亡時を想定し、事前に遺品の処分方法をまとめておく「エンディングノート」（B5判20ページ）を作った。希望のあった福祉施設や個人に4000部を配った。

ノートには遺品をどのように保管、取り扱ってほしいかを書き、遺産を寄付する希望先や遺言状の有無も記載する。家族や友人、知人宛てのメッセージを書き込むコーナーもあり、同協会の木村栄治理事長は「ノートに書くことを通じて自分とつながりのある人との関係を見つめ直してもらえれば」と訴えている。

エンディングノートの効果を説明する木村理事長